

全科協ニュース

おもな内容：◇平成5年度全科協事業計画案について

◇全科協北から南から

◇全科協事業研究会報告

平成5年度全科協事業計画案まとまる 大幅な拡充と連携の強化を目指す

平成5年2月8日(月)、全科協理事会が開催され、平成5年度の事業計画及び収支予算の案が承認されました。4月開催の総会を経て最終的に決定されますが、博物館職員現職研修など三つの事業を新たに始めるほか、海外科学系博物館視察研修に援助費の支給を始めるなど、事業の大幅な拡充が図られています。

また、総会を名古屋市でも開催するとともに、「全科協ニュース」を加盟館が分担して編集発行するなど事業運営の改善も図られています。

このような事業にあわせ、平成5年度は一般会計、特別会計合わせて14,622千円(対前年度9,303千円増)の予算が計上されています。

新たに計画している事業

① 博物館職員現職研修(ミュージアム・マネージメント研修)

博物館の現状を幅広い観点から理解するとともに、博物館の管理・運営に関する専門的・実践的な知識・技術についての研修を行い、博物館経営の円滑・適正化を図ろうとするもの。

国立科学博物館共催、東京大学協力。平成5年11月下旬実施予定。

② 研究発表大会

学芸員等の展示、教育普及活動に関する開発研究、実践や自然科学等に関する研究の成果の発表、情報交換することにより、博物館活動を活性化しようとするもの。平成6年3月上旬(第2回総会開催時)実施予定。

③ 科学博物館資料情報のネットワーク化に関する調査研究

全国の館が有する標本資料を最大限活用し、博物館における展示、教育普及事業、研究活動を一層推進するため、資料情報に関する全国ネットワークの形成について基礎的研究を行う。平成5年11月に研究会を予定。

従来 of 事業を充実するもの

① 海外の科学系博物館視察研修事業に研修援助費の支給

研修を充実するため、参加する正会員を対象とする研修援助費を計上。

なお、今年度は平成6年1月にヨーロッパの科学系博物館を視察する予定。

② 機関紙の編集発行事務の分担

ユニークな機関紙作りを期して、「全科協ニュース」の編集発行事務を編集委員館が行う。年6回発行予定。

上記事業を実施するため、平成5年度予算は、一般会計事業と特別会計事業を合わせ総額14,622千円を計上した。前年度予算額5,319千円に対し175%の増。会費の増額など加盟館の負担増は控え、外部からの寄付金や助成金の拡大を図っている。

(単位：千円)

収 入	前期繰越金	1,755	支 出	博物館職員現職研修	1,276
	会員会費	1,697		研究発表大会	423
	参加費	7,950		海外博物館視察研修	8,000
	雑収入	220		全科協ニュース発行費	1,355
	寄付金等	1,500		理事会・総会費	264
	助成金(石橋財団、特別会計)	1,500		科学系博物館資料情報ネットワーク 化に関する調査研究費(特別会計)	1,500
				予備費	1,804
	収入合計	14,622		支出合計	14,622

共催、後援による協力強化

全科協と各館の協力を強化するため、共催や後援名義の使用を積極的に進めることとされ、その取扱い内規が定められました。全科協との事業の共催等を希望される場合は、随時事務局に申請して下さい。

全 科 協 北 か ら 南 か ら

和鋼記念館 閉館

日立金属株式会社安来工場の附属施設「和鋼記念館」は、安来市が管理運営する和鋼博物館に発展的に吸収されることになり、3月20日以降閉館されます。和鋼博物館は4月28日の開館の予定です。

神奈川県立博物館 再編整備

神奈川県立博物館は、自然史系の生命の星・地球博物館と人文系の人文系博物館(仮称)に再編整備されます。自然史系は小田原市に新設され、人文系は現在の建物を活かして生まれ変わります。この準備のため平成5年4月1日から休館し、平成7年3月に同時に開館の予定です。

東京都児童会館 ミニシアター開設

東京都児童会館では、3月30日(火)から3D(立体映像)も楽しめるミニシアターを開設します。上映作品「メルヘンの世界」。

第3回サイエンス ミュージアム ラリー

科学技術週間を記念して22館の博物館の中から5館のスタンプを集めると素敵なプレゼントがもらえる。

参加館：板橋区立教育博物館、地下鉄博物館、北とびあ科学館、たばこと塩の博物館、天文博物館五島プラネタリウム、東京都児童会館、東武博物館、国立科学博物館、IBM情報科学館、交通博物館、通信総合博物館、NHK放送博物館、葛飾区郷土と天文の博物館、横浜こども科学館、東芝科学館、日立市科学館、科学技術館など

期間：3月27日(土)～4月18日(日)

企画展

葛飾区郷土と天文の博物館

葛飾区の伝統技術～まちかどの名人大集合～

期間：4月20日(火)～6月27日(日)

全科協事業研究会報告

パネルディスカッション「学校教育と博物館の連携」

パネリスト：埼玉県教育委員会生涯学習課長 村 田 文 生
パネリスト：浜松科学館事務局長 大 塚 哲 雄
パネリスト：お茶の水女子大学附属小学校教諭 田 中 千 尋
司 会：国立科学博物館教育部長 大 堀 哲

司会：「学校教育と博物館の連携」というテーマで、パネルディスカッションを行います。この問題は、この時間に解決するような簡単なことではありませんが、三人の先生方には、感じておられること、ご自分のお考え、今、行っていらっしゃることをとっかかりとしてお話しを進めさせていただきたいと思います。また、ご参加の皆様方からのご質問等をお受けし、できるだけ実り多い時間にさせていただければと思っております。

田中先生は、お茶の水女子大学附属小学校の先生をしておられ、博物館の学芸員の資格も持っていらっしゃいます。実際に先生になられて、学校の博物館利用ということを積極的に進められています。お茶の水女子大学附属小学校の場合は、第2土曜日のほかにもう1日休みがあるそうですが、こどもたちの状況はどうであるか、実際、休みにこどもたちは博物館とどのような関わり方をしているのか、あるいはお感じになっていることがあればお話しいただければと思います。

田中：今のお話しと少しずれるかもしれませんが、こどもたちが博物館に対して持っているイメージについて5年生に質問したことがありますのでお話しします。こどもたちの多くは楽しい所であるとか、学校だと図鑑でしか見ることができないものが非常に身近に見られるといったプラスのイメージを抱いています。ところがマイナスのイメージを抱いているこどももいます。具体的に言うと説明書きが非常に難しいため、こどもの意識の中に難しいというイメージが固定化しているようです。

こどもたちに博物館に対して何を求めるか、どうしてもらいたいか聞いたところ、「こどもでもわかるようにしてもらいたい」という答えが一番多くありました。

私どもの学校では土曜日隔週5日制を実施しており、課題選択学習を試行している段階です。こどもたちが博物館を利用する機会が増えてきています。私どもの学校は東京の真ん中にあり、非常に博物館に恵まれています。1か月にどの位博物館を利用しているかという平均1～2回位です。目的を聞いてみますと、自分で課題を見つけて、学習をする場として利用しているこどもが最近でてきています。いつ行くのか質問したところ、休日や土曜の休業日を利用していました。誰と行くかという意外にもこども同士で計画をして興味のある博物館を選んで行っておりました。月曜日になりますと研究というほどではありませんが、博物館に行った記録を持って登校してくるこどもが最近増えてきたという印象を持っています。

司会：お話しをお聞きしておりますとお茶の水女子大学附属小学校のこどもたちは土曜日の休みを理想的に過ごしています。必ずしもどこでもうまくいっているわけではないと思いますが、後ほど学校として博物館をどのような形で利用しているのか、利用するにあたって努力されていることなどをお話ししていただきます。

さて、大塚先生は学校の先生のご経験があり、浜松科学館の構想の段階から開館して今日まで携わってこられて数年になり、同館の中心的な仕事をされておられます。まず、浜松科学館の概要等から触れさせていただき、実際学校のこどもたちはどのように利用しているのかお話しいただければと思います。

大塚：学校の利用状況ですが当館は、年間16～17万人位の入館者があり、そのうち高校生・中学生・小学生が約6割、校外学習と遠足など学校団体が約1割の1万5千人位です。個人的に科学館に来る方が一番多いこととなります。

学校に利用していただくうえで、人の問題や物の問題があります。物については、当館では貸出して



右から田中、大塚、村田、
大堀の各氏

きるものがありません。

人についてですが、当館には学芸員がひとりもおりません。私も含めまして、現役の指導主事が3名、役所からの出向職員が3名、それ以外は、8名の学校教員OBを嘱託として雇っています。この8名の職員が私どもの館の事業を実際に展開していく役を担っております。例えば野外観察会やものづくり教室を学校で行いたいという場合、夏休みや春休みなどの長期の休みに、講師として派遣することには、十分に対応できます。

土曜休業日については、当館の実験室、創作室などの部屋を一般に開放し、第2土曜日ならいつ来ても利用できるようにしております。

科学館の道具や場所を使って物を作るなどの行事を行っていることが、学校でも理解してもらえた結果、科学館の創作室へ来て授業を行いたいという先生ができました。このような実践例を他の学校に話して、科学館を大いに活用していただきたいと考えております。学校として科学館をどう利用するかということに対して、学校にどう利用してもらいたいかということでも話のきっかけをつくっています。

司会：村田先生は広く社会教育、生涯教育に関する行政を以前は文部省で、現在は埼玉県の中でお進めになっていらっしゃると思います。今回のテーマは、“博物館と学校教育との連携”ということでありますけれども、必ずしも博物館にこだわらずに、埼玉県内の公民館、図書館等の社会教育施設と学校との関係、あるいは社会教育と学校教育との連携の問題などについて行政の立場からお感じになっていることをご発言いただければと思います。

村田：社会教育行政とは、図書館、博物館、公民館を整備したり、あるいは社会教育主事、学芸員、司書といった専門職を養成、研修したり、家庭教育学級などの社会教育活動、社会教育関係団体等の諸活動をお手伝いしたり、環境や条件を整備することが主な内容です。

今日のテーマになっております連携という言葉は、生涯学習を推進していくキーワードであろうと思います。なぜ連携が言われてきたかということ、ひとつの専門セッションでは対応できない学習要求が住民からでてきたため、これに対応することが必要になってきたことが大きな要因だと思います。生涯学習を推進していく私どもの立場からしますと、住民の方々が学習しやすい条件を整備していくことが一番のポイントになっています。本日のこのテーマになっている“博物館と学校教育との連携”というのは大きく言うと生涯学習時代における博物館はどうあるべきか、あるいは学校教育はどうあるべきかという論から、入っていくことが求められていくのだらうと思います。

連携をしていく場合に、まず押える点は博物館には、施設があり、設備があり、資料があり、人がいる、少なくとも4つの領域があると思います。

それから学校でも開かれた学校が求められております。学校もやはり、施設があり、教員である専門職の人がいます。

連携・協力というからにはお互いにフィフティ・フィフティの立場に立つことが大事だと思います。一方的な提供だけでは、連携とは言えないのではないかと思います。施設、設備、資料、職員という4つの領域で、今、田中先生や大塚先生がおっしゃられたような動きができてつあるということは、大変すばらしい、望ましいことと思います。それをどういう形で、可能な限り、お互いに協力できる仕組みに育てていくことが私ども行政に携わっている人間の役目だと思います。

司会：“連携”に関する“人”“もの”“場”など基本のお考えを示していただいたと思います。次に、博物館側、学校側においてこの問題について試みられている具体的なことをお伺いしたいと思います。大塚先生には学校の団体見学や学校の利用促進という観点で工夫されている点について、それから田中先生には学校として博物館を活用する際のいろいろな問題点や学校で努力されていること、事前学習、教材作製などについてお話しいただきたいと思います。

大塚：先程、田中先生の方から博物館・科学館について子どもや教員にアンケートをとってみると「難しい」という回答があったという話がありました。博物館に人の顔が見えていないと、やはり難しい施設になってしまいます。私どもの館では、講師として職員を派遣したり、また、夏休みの自由研究の相談とか、発明コンクールの製作の手伝いなどの指導に当たり、来館した親子となるべく接する機会を多くしています。顔が見えてくる科学館でありたいと思っています。

科学館のAさんのところへ行くと昆虫について詳しく教えてもらえる、いろいろな工作の仕方を教えてもらえる、相談ののってくれるといった対応ができていけば、こどもの持っている“固い”、“難しい”というイメージはある程度なくなっていくと思います。

そのほか、4月のはじめに当館の指導員がペアを組んで学校を訪問して、科学館で本年度行う事業を説明しています。指導員は、校長や教頭のOBが多いのですが、顔つなぎのため説明にはいきなり校長室へ入らないようお願いしています。去年までは後輩の校長であろうが、いきなり校長室へ行ったら、そこで職員とは切れてしまうため、職員室で科学館の宣伝をするようお願いしています。

田中：学校として博物館を利用していくことは、大変難しいことです。ノウハウがない、マニュアル化されていない、誰も教えてくれないため、ひとりひとりの先生が自分でその方法を作り出していくしかありません。どんなことを工夫しているかという、いままでの話し合いにもでてきている「見学」という言葉は使わないようにしております。この言葉には見物に近いようなイメージがあり“見て学ぶ”というのは非常に受動的な印象を与えるからです。低学年の子どもには難しい言葉ですが「利用又は活用する」という言葉を使い、博物館見学会ではなく、博物館利用活動、又は博物館利用学習という言い方をして言葉の面から意識を高めています。博物館を特別な場所と考えないで、クラスルームとか理科教室などと同じように学習の場として考えていく、子どもたちにもなるべくそのような意識をもたせれば、マイナス面の印象は消えていくのではないかと思います。

私どもの学校では、週2・3時間ですが、教科とは別に、創造活動という時間があります。学習のカリキュラム化はされていないので、学習の一貫として学年の実態に応じた活動内容を組んでいます。国立科学博物館、通信総合博物館、科学技術館、船の科学館は何回も利用しています。毎年ではありませんが、6年生の学習に東海大学海洋科学博物館も利用しています。子どもたちにとって非常にわかりやすい展示なためわざわざバスで連れて行きます。また、ちょうど4年生が林間学校で鹿沢に行きますので、浅間火山博物館も利用しています。非常に優れた展示で、われわれがそのような展示を学校の中に作ることは不可能ですし、図鑑を何10ページ読むよりもあの博物館を30分間見る方がどれだけ教育効果が高いかと思います。なるべく事前指導をして学習効果が上がるよう努力しています。浅間火山博物館の展示が大変おもしろくもう一度行ってきたという子どもも現れました。むしろここからが本当の学習なのではないでしょうか。

村田：生涯学習を考えていく場合に、どちらかというと“生きがい”という点を考えがちですが、自己教育力が学校時代にきちんと習得されることがキーポイントです。今の子どもたちは、4無主義、3無主義と言われるように、美しいことを美しいと思わない、悲しみ、感動をもって表現することもたちが大変少なくなってきました。指示を待って初めて動く指示待ち人間の子どもたちがあまりにも多くなっています。人から教わらないと驚くとか感動するということができない子どももいます。実体験、つまり手で触り、自分で何かを作り上げたという達成感が生涯学習には大事なことです。学校5日制導入の目的のひとつは主体的に自らの意欲でものごとにチャレンジしてやってみる子どもを育てることです。学校5日制に対応して、子どもたちが自由に自らの意欲で自主的に選択していく場が博物館や公民館、

図書館でたくさん用意されているということが大切です。主体的に何でもできるような場をいろいろな所に等しく開放されることが生涯学習という観点から一番大事なことです。子どもたちを育てる意味合いでは実体験の場として博物館にお世話いただきたいと思います。

司会: 学校の先生方に博物館を大いに理解して、子どもたちに博物館の活用を積極的に働きかけていただきたいと思いますが、田中先生、先生方の中には博物館に対する見方は必ずしもプラスのイメージだけではなくて、博物館になかなか子どもたちを連れてくる気持をもっていただけない方も実際には多いと思いますがいかがですか。

田中: 同僚の先生に、博物館に対する印象を一言で表現するとどのような言葉になるか聞いたことがあります。驚くほど博物館に対する印象は悪く、非常に意識が低いことに驚かされました。「難しい、古い、暗い、専門的過ぎる、ガラス越しに見る所」このような印象が多いのです。プラス面は、普段なかなか接することのできない新鮮な驚きがある、豊かな気持ちになれる空間であるといった印象を持っています。研究熱心な人は、博物館をよく見えています。

司会: ご参加の先生から今のご発言に必ずしもこだわらずにご発言いただければと思います。滝川市立美術自然史館の吉住先生いかがでしょうか。

滝川市立美術自然史館 吉住: 博物館の資源の有効活用と、学校の先生及び子どもたちに博物館のイメージを変えてもらうことが大きな目的です。市内7校の小学校のうち学校利用は1校しかありません。先生方に伺ったところ「子どもたちを連れて行ってもわからない」という答えが返ってきました。確かに解説文を読むと難しいことは否めませんが、恐竜などを見た時に何か感じるものが子どもたちそれぞれにあるはずですが、先生が難しいというだけで機会を逃してしまうのは大変残念です。現在、子どもたちが地元の宝物を理解できるように、空き教室を利用して移動博物館を実践しています。はじめて2か月ですから成果がどうこうという訳にはいきませんが、この移動博物館をきっかけに、博物館へ足を運んでくれる子どもたちが増え、また、教職員の方々に1年生の子どもたちにも理解できることがわかっていただければと願っています。私どもの考え方だけでなく学校の先生方のお話し等をお聞きしまして、行っていきたいと考えております。

村田: 今の件でお聞きしますが、学校の理解を求めていく場合、学校の授業がいまどのようなカリキュラムで行われているか、今お話のあった移動博物館がどういう場面で活用できそうか調べられたり、教科書を読まれたりといったことは、されているのでしょうか。

滝川市立美術自然史館 吉住: すべてのカリキュラムについては、把握していないのが実情です。私どもの一方通行にならないように学校側と話し合うことが必要だと感じております。

司会: 今、博物館側では、学校のカリキュラム、指導要領、教科書などをどう研究しているかという話がありました。例えば小学校の3年生が博物館に来る時に、その対応がうまくとれるような博物館側の研究体制が連携を考える時に大事な要素になるかと思います。この点を踏まえてご自由にご発言いただきたいと思います。名古屋市科学館倉知先生いかがでしょうか。

名古屋市科学館 倉知: 名古屋の中心地は都市部で星が見えないため、学校の星の学習に当館のプラネタリウムを活用してもらっています。今年の5年生ですと人体の科学の学習がありますが、当館の展示物を使って学習するとなると学校から地下鉄やバスを使っても最低でも授業4時間分はかかります。先生からすると、1時間分の授業のため4時間分をかけて利用するのは、なかなか難しいことと思います。

司会: 博物館側として先生方に対してどういう働きかけをしていくかということで、各博物館では努力をなさっておりますが、京都市青少年科学センターの長谷川先生のところでは、システムが教育委員会をはさんではっきりしているように思いますが、いかがでしょうか。

京都市青少年科学センター 長谷川: 私どもでは、科学センターの“センター学習”として、市内の小学校5年生から中学生までを受け入れております。学年によってその学習内容は違いますが、実験室での学習をはじめ展示学習、プラネタリウム学習などがあります。

展示学習では、たくさんの展示品を見て学ぶのではなくて、わざと1、2点に集中して学習します。

私どもの所員が展示品にいかにか働きかけるかに重点を置いて、後日その展示品から学んだことが転じて再び科学センターを訪ねてくれることを願って学習を進めています。私どもの方では教育委員会・学校と非常に密接にかかわっています。内容的には指導要領とか学校の理科の教育を踏まえていますが、独自の科学的なものの見方を重視した立場で実施している状況です。

学校の先生方に科学センターへの意見を言っていたり“専門員制度”を設けております。年数回、学校現場の意見をいただき、活用しています。

また、学校には科学センター利用の手引書(しおり)を配布して、利用にあたって心掛けていただきたいこと、私どもの目的を周知しています。それを読んでいただいたあと、当センターで制作した5分間程のビデオテープを利用する前に見ていただいております。

村田: 指導要領では、今回初めて博物館・郷土資料館等の施設が明示されましたが、例えば教科研究会といった場に招かれて一緒に研究を進めるなどなされた館はございますでしょうか。

東海大学海洋科学博物館 鈴木: 今お話しいただいていることと少々筋が違うかも知れませんが、本日の研究会のテーマは「学校教育と博物館との連携」ですが、博物館も教育機関で「博物館における社会教育と学校教育との連携」と理解しておりました。この2つのことは、同じようではあるが、実は、別のことのように思います。ここで論議されているのは、「学校教育と博物館との連携」なのか「博物館における社会教育と学校教育との連携」なのかははっきりしておかなければならないかと思えます。

私どもでは、学校教育と連携したサマースクールを行っております。学校教育と関連づけるため、行事については学校の先生のご意見をお聞きします。終了後も反省会でおたずねしています。意見、感想を聞いて進めています。学校教育のどの部分と連携しているのか、必ずしもはっきりしないのです。お伺いしたいのは、どうすれば学校との連携を高めることができるか。博物館を学校で利用する場合に1回だけでなく、繰り返して何回か行かなければ学習にならないのかということです。対象とする博物館はどのようなところがふさわしいのか。例えば2年生にはどこがふさわしいのか、それとも2年生も3年生と同じところへ行くのがふさわしいのかお聞きしたいと思います。博物館サイドとしては、学童と連携するのではなく、学校教育と連携したい。学校サイドに相談してみても単発的でどうしてもはねかえってこないため教育委員会にも声をかけます。博物館は社会教育の場ですから、いろいろな準備をしています。学校の教育は、カリキュラムがきちっとしている。博物館側の教育はカリキュラムがはっきりせず、学校教育に対応する社会教育・博物館教育がしっかり座っていないと思えます。学校側にどうしたら学校教育との連携が詰められるかということもお伺いしたいと思います。

司会: 今、鈴木先生がおっしゃられたことについて申しますと、子どもたちの科学への興味・関心を高めるために、私たち博物館と学校教育がどのように連携していくか、とりわけ博物館側から言えば、学校と協力して博物館において児童生徒の学習活動をどう高めていくか。あるいは学校としては、博物館の中でどういった活動をさせていくべきか、博物館の協力をどのように求めていくのか、あるいはできるのか。これらのことについて両者の事前の話し合い、調整等が大切かと思えます。このようなことによって博物館と学校との連携を高めていく必要があるだろうという意味でこのテーマを設定したつもりであります。鈴木先生のご発言に関していかがでしょうか。

田中: 先程のお話ですと、博物館で行っていることが学校でのカリキュラム等とどのように連携しているのかが明確になっていないようだということでした。東海大学の博物館は私自身6年生と一緒に何回も行ってありますが、決して関連がないとは思っておりません。これはひとつの例ですが我々の創造活動には区切りがあり、“海なら海”、“水なら水”という大きな区切りがあります。“海”という学習の中で子どもたちが学校で調べるとした場合、図鑑や難しい本を引っ張り出してきて一所懸命書き写します。これももちろん学習ですが、私は生きた学習ではないように思えます。博物館の中に1日いることによって、生きた資料、動く百科事典といった学習が展開されていくような気がします。遊んでしまう子どももいますが、あとから授業をしている中で、“前に行った博物館にあったよ”とか、博物館で見たことがおもしろくてそれについて学習をはじめるとか、何か子どもの心の中でひとつでも博物館へ行ったこ

とによってひらめいたり、残っていくものがあり、それが種となって新たな課題を見つけていく。このような場としての重要性を私は強く感じます。必ずしも学習指導要領に沿って展示したり、執着しなくても良いのではないかと思います。

それから学校教育との連携がどうしたらうまくいくかということですが、これは非常に難しいことですが、地域の方、知り合いの研究所の方、大学の先生などをお呼びして、2時間でも3時間でも理科の授業をしていただく。講演ではなく教科書のある単元について専門家に任せて授業をしていただく。そうすれば子どもたちはわからないなりに強いインパクトを受ける。それがそのあとの学習に非常に発展性を持たせていく要因になる。博物館の先生が自分の学校の先生のひとりであるというシステムをつくっていくことができれば良いと思っています。博物館の先生は努力しているけれども学校側がそれに気付いていないのではないのでしょうか。もっと絡み合っていけば良いのではないのでしょうか。

司会: 大塚先生としては、博物館側からもう少し考えなければならないことがあるのではないかと思います。

大塚: 浜松科学館では指導者実技研修会という事業を行っております。先生が子どもたちを引率して来た際、展示のうちのひとつでいいから操作していただきます。子どもの反応として“先生すごいなぁ”、“博物館は親しみやすいところなんだなぁ”と考えてくれるのではないかと思います。しかし、実際の例が少ないのが実情です。どういことが原因かということ、一日ぐらいの研修では無理だと遠慮されたり、子どもの前で失敗するのを恐れて先生が演技者になりきれないからです。

また、積極的に校長会に出席しています。浜松市内の小・中学校を合すると96校ありますが、そのうち利用したのは、10人いるかないかです。現場の先生がお忙しいのもわかりますが、こちらからも出向いていき、校長会を当館を会場にしてもらっています。直接質問の答えになっていないかと思いますが、こういったオープンなところが必要かと思っています。

村田: 生涯学習を推進するという意味合いから連携を考える場合、まず、学校教育サイドと学校外活動のサイドという2つの領域があろうかと思っています。それから施設の開放と授業の開放、人の開放、仕組みの開放があり、どううまくかみ合うかといった視点で考えていくと、今まで見えなかった点が整備されるのではないのでしょうか。ある程度詰めてそれぞれの領域を考えていかないと総論ばかりで変わっていきません。例えば移動博物館であれば、どういったところがお互いに連携できるポイントなのか、うまくいかなかったとしたら、それはどういったところなのか。資料の貸出しならば、ただ貸出すだけではなく、資料の学習効果が高められる展示技術をもつ学芸員も一緒に派遣してお手伝いをするといったきっかけから心や人の交流がはじまっていくのではないのでしょうか。

施設開放という点では、良いと思いますが、施設・設備・資料・人という仕組みの4つの横の軸と、学校教育と学校外活動という2つの軸という観点からもう一度見直してから連携論を考えると、あるいはひとつの整理ができるのではないかと思います。

学校の週5日制が開始されたことは、社会教育施設としては、子どもたちにいろいろな場を提供してあげられる絶好のチャンスなので、いろいろな事業を行ってほしいと思います。これは、公民館・図書館も同様で、利用へのチャンスを生かさなければ、いつまでも埋没してしまうのではないかと思います。我々ももっと施設を越えて、一歩進めて手を差し伸べなければならないのではないかと思います。

司会: 博物館と学校教育との連携をいかに進めていくか、3人の先生方のお話しからくみとっていただけたところがたくさんあると思いますが、博物館は学校のカリキュラム、行事等についてどれだけ理解しているか、学校側は博物館活動についてどれだけ情報を得ているのか、両者がそれぞれ相手の状況を把握することが大事だと思います。そして、連携する領域をお互いに話し合っ決めて、役割を分担し合い、どちらからも決しておしつけないようにすることだと思います。いずれにしましても、この問題は急いで結論を出せるものでもありませんので、これからももっと議論を深めていかなければと思います。たいへんありがとうございました。

(敬称略)

(文責：編集部)